

Title	蝦夷, 古代史談話會編
Sub Title	
Author	江坂, 輝彌(Esaka, Teruya)
Publisher	三田史学会
Publication year	1956
Jtitle	史学 Vol.29, No.3 (1956. 12) ,p.123(351)- 127(355)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19561200-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ことを教え、「外來文化の攝取について」では多くの例を引いて、新しい文化の創造は新鮮な外來文化の攝取によつて、異質の文化の受容によつてなされる所以を説き、「わが國の獨立について」はここでも實例に則して、就中「假令ひ或は其文明をして頗る高尚のものならしむるも全國人民の間に一片の獨立心あらざれば文明も我國の用を爲さず之を日本の文明と名く可らざるなり」という「文明論之概略」の言葉を引用して、個人も國家もその完全なる生長には獨立心が必要である所以を語り、「國史における變革とその主動者」では日本史上の三大變革即ち大化改新、鎌倉の開府及び明治維新に於ては社會階級の交替は全く認められず、變革の主動者は何れも在來の特權階級であつて決して被治者階級ではなかつた。大化改新は貴族によつてなされた變革であり、これによつて部民は解放されたが、それは與えられた自由であつてかち得た自由ではなかつた。鎌倉開府も武家の勝利を意味して、一見階級の交替のようにも見えるが、武家の前身たる豪族は貴族に由來するもので必ずしも被治者階級ではない。更に明治維新に於てもその改革は新興階級によるものではなく、武家自らの手によつてなされたものであつた。かくの如く變革に際して下剋上の見られなかつたところにわが國に於る變革の特色がある。これは如何なる理由に基くものであろうか。一つには變革の主動者が有識者であつたからである。わが國の變革が一面進歩的でありながら他

面保守的であつたのは、その主動者が有識者たる治者階級であつたからであると著書は結論している。最後の「戰記物語にあらわれた中世武士と戰爭」は中世の武士が如何なる態度で戰場に臨み或は如何に戰爭を見、如何に戰爭に武士道精神が發揮されたかを所謂戰記物語を通して考察したもので、そこには傳統としての日本人の情操が、武士の特殊な生活によつて鍛鍊された倫理觀として自ら發露してをり、また武士の本然の姿が最もよく描かれているといふことを説いたものである。

本書はそれぞれその執筆の動機を異にする數篇を含んでいるが何れも固定した視點に支えられた文化史觀によつて貫かれ、隨所に著者の識見が窺われ啓發されるところ多大なるものがある。大方に推奨する所以である。
(淺子勝二郎)

蝦夷 古代史談話會編

朝倉書店發行、昭和三十一年五月十日刊

本書は先に刊行された同じ古代史談話會編の『耶馬臺國』と同シリーズの圖書で、古代史研究第二集として發刊されたものである。布裝幀、A5版 本文二六二頁、アート圖版二頁で、卷末に『蝦夷關係文獻』と題し明治以降に發表された蝦夷關係の研究文献が、著者、題名、掲載誌の順で一二頁に涉て記されており、

研究者には便利である。

本文は田名網宏、坂本太郎、井上光貞、肥後和男、鈴木尙、齋藤忠、八幡一郎氏など七名の人々によつて執筆され、七名の著者の表題を掲載順に紹介すれば次の如くである。

田名網宏 古代蝦夷とアイヌ

坂本太郎 日本書記と蝦夷

井上光貞 陸奥の族長、道嶋宿禰について

肥後和男 古代傳承と東國

鈴木尙 東北地方の古人骨

齋藤 忠 蝦夷の文化とアイヌの文化

八幡一郎 アイヌ文化における日本的要素

以上の諸論文を見ると、坂本博士の日本書記に記された蝦夷に關する記事の史的價値を論評されたものと、井上光貞氏の蝦夷出身の道嶋宿禰に關する考證を行つた論著は別として、他の五人の著者は各々の立場にたつて、蝦夷 アイヌ説、非アイヌ説、中間説を稱へており、日本史、考古學、人類學などの各々の第一線の研究者が、各々の異つた觀點に立つて、獨自の見解を披瀝していることは甚だ興味深いところがある。

近年人類學、考古學の研究が急速的に進歩し、その成果にも見るべきものが非常に多くなつてきているが、古代東北日本で文献上で活躍した蝦夷と呼ばれてきた人々が、われわれと異つた人種

であるか、同一人種であつたかは未だ決定的な結論を得るに至つていない。東京都立大學文學部助教授田名網宏氏はエゾとエミシは異なるもので、後世エゾと呼ばれたものがアイヌであり、新井白石の『蝦夷志』がエゾとエミシ・エビスを同一視した最初の著書であろうと指摘し、後世の史家が誤つて混同したことが今日禍して、エミシ即アイヌ説が稱へられているのであらうと云う意味のことを記され、結論では『北海道は別として、奥羽北部以外では蝦夷と呼ばれたものは、アイヌというよりは、日本人と人種的にはあまりちがわない蠻民にすぎないものではないかと思う。』と記し、日本史學者として、エミシの非アイヌ説を主張されている。

日本古代史、神話の研究などで著名な肥後和男博士は、常陸風土記などにあらわれる説話上の異民族、クズ ツチグモ ヤツカハギ サヘキなどについて考證され、これは名稱を異にしているだけで實は同類で、エゾをさしたものに外ならないと記され、繩文式土器を使用した人々は蝦夷と關係づけられる公算も決して小さくならうと想像している。と記し、遠慮深く蝦夷 アイヌ論を主張されている。

東京大學理學部人類學教室主任教授の鈴木尙博士は、その専門とされる形質人類學的な立場から、『東北地方の古人骨』なる表題のもとに、青森縣下で出土したアイヌと思われる近世の人骨について、その出土遺跡を紹介し、その人骨に對する形質人類學的所

見を記し、ついで青森縣上北郡六ヶ所村泊の洞窟から土師、擦文土器などと共に發掘された人骨について、所見を記しておられるが、その中で『泊村通稱大穴發見の人骨はその形質から考えるときは、日本人遺骨と考えるのである。もし私のこの考察に誤りがないならば、最も蝦夷的と考えられるこの下北半島の僻地に、既に古墳時代に日本人が居住していたことになる』と記し、次に先年鈴木博士が親しく調査された岩手縣平泉中尊寺の奥州藤原氏四代の遺體について形質人類學的な研究結果を紹介され、この項の最後に『藤原四衛の各個人は夫々に多少の變異があるけれども個人の計測と觀察を基にして、藤原氏一族に歸納するならば、アイヌと考えるより日本人と見做すのを穩當と見做す。』と記し、五節の『むすび』では、博士の研究結果を一應要約し、ついで諸家の蝦夷 アイヌ、否アイヌ説を簡略に紹介、批判され、最後に『アイヌが曾つて本州一帯に廣がつていたと見做すよりも、寧ろアイヌと日本人との人種的境界線は太古以來津輕海峽であると考えべきではなからうか。但し地理的に見ても兩者は甚だ近い關係にあるから、相互の交通は古くから必ずあつたに相違ない。従つて北海道アイヌが奥州の北部に渡來し、居住することは當然あり得ることである。私は文献上の近世アイヌおよび本編に述べたアイヌ人骨はこの様な北海道から渡來した人々および遺骨と考えたいのである。』と記し、蝦夷、否アイヌ説を主張されている。

文化財保護委員會事務局、記念物課に勤務される、齋藤忠博士は、一序において、『蝦夷に關する從來の研究の焦點は二つあつた。その一は大和朝廷の蝦夷征討に關する史的事象を追及しようとするところであり、その二は民族論的な視野に立つて蝦夷を考え、しかもこれが現代のアイヌといかなる關係にあるかを考察しようとするところであつた。』と記し、ついで、小金井良精、鳥居龍藏、喜田貞吉、金田一京助、長谷部言人博士などの蝦夷、アイヌ 否アイヌ説を紹介され、最後に東北大學教養學部の伊東信雄教授の最近の研究成果を紹介、『東北地方に彌生式土器をのこしたのは西日本からの移住民でなく、東北土着の人々であるとなし、東北古代の住民は平安朝になつても蝦夷と呼ばれ、日本民族とは人種的にも文化的にも違つたものと見られていたが、遺物の示す限りにおいては、東北北部の住民も彌生式文化時代の昔から西日本と大差のない文化をもち、同じような生活を營んでいたことをといている。』と記し、『古代史上にいう蝦夷の文化に關連するものとして伊東氏と同様の意見論をのべたことがあつた』と記し、この論稿では文化の上からあらためて蝦夷と古代日本人との關係を考え更に蝦夷とアイヌとの問題について、二考古學より見たる東北古文化の素描、三歴史上の蝦夷と考古學的解釋、四蝦夷の文化とアイヌの文化、五アイヌの文化と古代日本人の文化、六結、と五節に區分して博士の考えを披瀝されており、第三節で『文化

の一貫した系列の上から見ても蝦夷は、古代日本人と別個な異民族とすることは困難であり、根幹において古代日本人の中に入れてべき同一の人々であり、同一の文化をになつていた人々でありただ地域的な環境的な差異と、ある時期における中央文化との隔絶がもたらした相違とがあつたに過ぎないのである。」と記し、六結においては五項目にわけて記され、『一蝦夷は古代日本人とほぼ同一の文化をもつていたものであり、本来異なる民族であり、低級な民族とすることは困難である。』とされ、結の四では『蝦夷は廣く古代日本入に包括されるものであり、今日のアイヌの一部をも形成していることは肯定して差支えないものであろう。』とされ、五で『蝦夷が古代日本人に包括され、しかも蝦夷はその一つの系統としてアイヌとむすびつけることが可能であるとき、アイヌと古代日本人との間に指適される慣習習俗の類似も必ずしも偶然の一致ではなく古代日本人と一脈の關係をもつことにあらわれた共通要素の殘影とも見られるのである。』と中間説を主張されている。

最後の東京大學文學部の八幡一郎講師の執筆になる『アイヌ文化における日本的要素』は、序、結、ともで五節にわけて記され、二アイヌと蝦夷の項で『縄文式文化を遺した者とアイヌとの關係の有無を論議する場合、いつも障碍となる點は、縄文式文化とアイヌ文化との間に横わる深大な異相である。アイヌ文化には縄文

式文化の傳統と見るべき片影すら認められないと説かれるのが常であつた。ところで、アイヌ文化とは一體いかなるものかということが、未だ充分に究明されていない。その構成要素には日本的なものが少くなく、また北東アジアの隣接諸族に由來するものも認められる。このような分析によつて、日本的なるものおよび大陸的なものを除き去つた後に殘る要素こそ、アイヌ固有のものとするべきであらうか。そのようにして考えられるアイヌ固有の文化要素が、依然として縄文式文化と異なる様相を示すであらうか。

私は先づ所謂アイヌ文化の内に潜在する日本的なものを摘出したい。ことに物質文化面に於てこれを試みたい。』と記し、ついで『古代に於ける攝取は、所謂蝦夷を通じてであらうか、それとも北海道居住のアイヌの祖先が所謂日本人から直接に受取つたのであらうか。ここにまた蝦夷の地位を顧みるべき契機が存するのである。』と記され、三節においては『アイヌの作物』の表題で、稗粟などのアイヌの説話や言語學的な方面などについて述べられ、四節では『アイヌの農耕』の題で、耕地のこと、農具のことなどについて記され、五結において、『アイヌの文化構造の分析を通じて、日本文化の浸透度の強さを知り得ることは、ただに上記のような農耕問題には限らない。否寧ろ農耕以外の諸般の問題に鮮明な點が多いとさえ云い得る。こうした文化融合が既に古代に始まるとするならば、古代日本人とアイヌの祖との直接的交渉によ

るのであるか、それとも史上の蝦夷を通じてであろうか。若し常識的に且つ直截に云うなれば、蝦夷の名で呼ばれるものはアイヌの祖に外ならないともされよう。この問題の解明には尙幾多の途が残されている。」と結ばれており、八幡氏はアイヌ論を主張されるかのように思われる。

以上に記した如く、蝦夷、アイヌ説、否アイヌ説、中間と五名の著明な研究者が各々異つた立場から異説を記しており、この問題が如何に深遠で難解なものであるかを如實に示している。

蝦夷が如何なる人種であり、如何なる生活をしていたかは到底今日に残された古記録の考證のみによつては解明し得ぬ問題であり、今後の形質人類學、考古學、民族學、言語學などの諸方面の研究を綜合して始めて解明せらるべき問題のように考える。

今日においてはようやくその研究が緒についたと云う感が深くまだこのように明確な結論が得られず異論百出するのはまた現在の研究段階では當然のようにも思われる。

なお私見を記すことが許されるならば、田名網氏や、鈴木博士の考説は、私の考へに最も近いものであり、正しい見解のように思われる。なお筆者には若干異つた考説もありそれらについては稿を改めて記したいと思う。

以上諸先學の蝦夷 アイヌ、否アイヌ説を摘出し、本書の紹介に代える次第である。一讀をお奨めする。(江坂 輝彌)

中國民族學報 第一期 民國四十四年八月刊

中國民族學會(民國二十三年、南京にて設立)の機關誌「中國民族學報」がこの度、臺北に於て創刊された。凌純聲を主任とする編輯委員會の中には何聯奎・芮逸夫等の名が連ねられてゐる。本誌掲載するところの論稿は、悉くで十一篇。冒頭は何聯奎氏の

「四十年來之中國民族學」で飾られてゐる。本稿は所謂西學東漸後の中國に於ける民族學發展の足跡を具さに回顧、整理せられたものであるが、何氏はこの中で中國民族學の發展を四期に分つて説いてゐる。即ち、民國十五年頃までの萌芽期とも云うべき期間には、専ら歐米民族學の紹介に止まつた時代で、學的動きは余り認められぬが(以上第一期)十六年、蔡元培により中央研究院が設けられ、社會科學研究所が民族學的研究に従事するに至つてより約十年に亘る期間は、E. Smith や W. Schmidt 等西歐學者の渡華による刺戟もあつて漸く中國人自身の手による研究も興り邊境民族に對する科學的調査等も開始せられるに至つた。(以上第二期)ついで民國二十六年より三十七年に至る間は、略々對日抗戰期に當るが、その特殊事態にあつて多くの學者は四川等をはじめとして邊境に四散し、この期の研究は期せずして西南中國等の少數民族の社會に注がれた。(以上第三期)最後の段階は國共紛事に